

ISSN 2186 – 3989

巖谷小波の『世間學』と教育観に関する覚書

板倉 栄一郎

Memorandum about “SEKEN-GAKU” written by Sazanami Iwaya
and his view of education

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要
第52号(2022年3月)抜刷

巖谷小波の『世間學』と教育観に関する覚書

板倉 栄一郎*

Memorandum about “SEKEN-GAKU” written by Sazanami Iwaya
and his view of education

Eiichiro Itakura*

Received December 27, 2021

Abstract

This paper introduced “SEKEN-GAKU” (1908) written by Sazanami Iwaya, a well-known writer and children’s literary writer, and its analysis, clarifies the material value from a pedagogical point of view and his view of education. And the purpose is to discuss the educational significance of modern times by considering.

Sazanami Iwaya has published two books on the subject of education- “MOMOTARO SYUGI NO KYOIKU”(1917) and “MOMOTARO SYUGI KYOIKU SINRON(1931)”- and “SEKEN-GAKU” is closely related to these two books. Then by analyzing “SEKEN-GAKU” and knowing his view of education, humanity, and sense of the times, the modern significance of “SEKEN-GAKU” became clear.

In conclusion, “SEKEN-GAKU” discuss Sazanami Iwaya’s view of humanity in relation to “SEKEN” and is characterized by the fact that it is discuss based on the ideas of Western Europe and the position of Japan as an emerging country. Argues that positiveness is necessary for the Japanese. This idea was the view of education that Sazanami Iwaya had for the rest of his life, In addition, this book has something in common with modern Japanese moral education and career education, and its material value is recognized there.

Key Words : “SEKEN-GAKU” (written by Sazanami Iwaya), moral-education
career-education, aggression

はじめに

本稿は、児童文学者として名高い巖谷小波が著した『世間學』（1908年）を紹介し、その分析を通して教育学的な観点からの資料的価値を具体的に明らかにすると共に彼の教育観を考察することで現代における教育的意義についても論じることを目的とする。

小説家、児童文学者として語られることが多い巖谷小波（以下、「小波」と記す）であるが、彼は『桃太郎主義の教育』（1917年）や、その後に細かな部分を修正して発表された『桃太郎主義教育新論』（1931年）の教育に関する2冊の著書を世に出している。彼の教育に対する考え方を知りたい場合は概ね、これらの著書に触れることで完結するが、彼の教育論の根底となる人間観や時代感、社会観（世間観）にまで踏み込んで考察しようとした時、『世間學』は有益な資料であり、先に示した2著書とも密接に関係している。その意味で、小波の教育観の深層に迫る場合、『世間學』は不可欠な資料である。

小波の教育観や人間観は、『世間學』発刊以後、彼が亡くなるまで一貫している。彼が活躍した時代は、明治後期から昭和初期までであるが、この時代は、対外的には日本が国際社会における一等国としての地位を獲得していく時代であり、軍国主義に傾斜していく時代である。そして国内では、産業革命以後の産業構造の変化と、それに伴う新中間層の出現、都市と地方の格差などが顕在化した時代であり、学歴社会が台頭する時代でもある。このように、彼が活躍した時代は日本社会におけるまさしく激動の時代、変化の時代であり、そのような時代背景の中で教育への思いを抱き、それを世に問い続けた彼の教育観を論じることで、現代日本の教育の方向性にも示唆を与えるものと考えている。

本稿では、最初に、『世間學』執筆の目的や内容の分析を通して、小波の「世間」の捉え方や教育観、人間観を確認する。次に、『世間學』が『桃太郎主義の教育』や小波が著した幾つかの著書に密接に関係することを明らかにする。そして最後に、『世間學』に関して、その資料的価値や現代日本における教育的意義について論じることにする。

第一章 『世間學』と「人間學」

第一節 巖谷小波の「人間學」

本節では、『世間學』¹執筆の目的を考察するために、『世間學』と「人間學」との関わりについて確認したい。

序文は、以下のような書き出しで始まる。

世間學とは、大學の講座の中にも見ない名だ。それは其筈。これは此度此書を出すに付いて、新たに案出した名であるもの。其意は讀んで字の如く、世間を知るの學である。蓋し世間とは、人間の集合したものを指す。此故に、世間を知らんと欲せば、まづ人間を知らざる可からず。人間を知らんと欲せば、まづ自己を知らざる可からず。

世間學とは、彼の造語であり、その意味する処は、世間を知るためには、まず人間を知り、人間を知るためには自身を知るべき、ということである。そして、この序文を受けて最初に「人間學」（第1章²）と題して書き記している。彼の言う人間學の考え方は、『桃太郎主義の教育』³にも一貫しているので、「人間學」について見ておきたい⁴。

人間學は、全15章ある内容構成の中で附録を除けば最も頁数が割かれ、彼の人間観や

人間と世間との繋がりについての自身の考えが具体的に記されるなど、いわば『世間學』の中核を成すものである。この人間學について、彼は「人間として人間を研究する學」と定義しており、その研究方法として、

- ・これには生憎學校も無い、教師も無い。また教科書と云ふものも無い。只人間各個が相互の人間を観察する事に依て、初めて研究し得るの外は無い。
- ・人間學の教科書は、むしろ人間其物である。

の2点を挙げた上で、「萬卷の書を読まずんば、須らく萬個の人に接すべしと云ひ度い。」と主張するのである。

次に、彼は書籍を引き合いに出して、「實に人間は生きた書籍である」として書籍と人間とは類似すると一通り記し、次いで「書を読むにはまづ字を知らねばならぬ如く、人を知るには、また人を知るだけの眼を、予め備えなければならぬ」と記した後で、その相違点を指摘する。すなわち、

書籍は平面であるが人間は立方體で活動的で、更にまた變轉性のものである。

と。そして、それを受けて、人間が立方體であるなら、その一面だけを見て全体を批判することはできない、と記し、また、同じ人間でも時代によって性格が変わり、境遇によっても心情が異なってくる、と記す。更に小波は、人間の口は心とは全く反対のことを言う動物で二面性がある、と記した上で、これに関連して、

品行方正の人、必ずしも人格が高いとは云へない。

と論じるのである。小波のこの見解は、以後の彼の教育觀や人間觀を貫くものであり、本稿を進める上で注目しておきたい。

続けて、小波は、「人間は十人十色、各人各個に性情を異にすると同時に、その各人各個ながら、時と場合で、また心情を變ずるとすれば、之を観察して研究するのも、蓋し容易な事では無いのだ」と記した後で、その秘訣について、

對手の人間を観る前に、まづ、自己を省みる事だ

つまり、「他人を観察する前に、まず自身を研究せよ」と記す。そして、

人間を深く研究すれば、自己は他人の鏡となり、他人はまた自己の鏡となり、又々相對照して、所謂立方體なる人間が、正しく觀察し得るのである。

とし、「かくして人間學に及第する者が、即ち處世術の成功者である」と、本章を締めるのである⁵。

小波は、世間を「人間の集合したもの」と捉えており⁶、「人間學」を『世間學』の出発点として考えている。そして、「人間を深く研究すれば、自己は他人の鏡となり、他人は自己の鏡となる」と考え、「人間學に及第する者が處世術の成功者である」と主張する。この考え方は、現代の道德教育やキャリア教育にも通じるものがある⁷。ここで、次に彼が「人間學」や「世間學」の考え方に到達した手掛かりを知るために、彼の半生を簡単に辿っておきたい。

第二節 巖谷小波の半生

小波の半生については、彼がその著書、『小波身上嘸』⁸（1913年）で自らの半生を一冊の本にまとめている。彼の教育観や人間観について論じる際、彼の半生を理解しておく必要がある。本節では、『小波身上嘸』の記述を参考に、彼の半生を簡潔に見ておきたい。

小波は、本名を季雄といい、1870（明治3）年6月6日に武蔵國麴町谷町武家地・三軒家坂上（明治5年に東京麴町平河町5丁目10番地に改）で生まれた。父・修（後、一六と号す）は、近江国水口の藩医として家業を継いだ後、新政府に召喚されて太政官に務め、退官後、貴族院議員を経て書家としてその生涯を全うした。母・八重は、季雄を生むとまもなく大病を患い、その四か月後に肺炎を併発して他界した。季雄は、その後、義母・茂登に育てられることになった。幼少の頃の小波は、経済的に恵まれ、実父の社会的地位も高い、いわゆる最上位層の出身であり、彼の言葉を借りれば、“順境⁹”であった。

小波の学問や児童文学者としての自立については、彼の長兄である立太郎が少なからず影響している。『小波身上嘸』には、「子供の時分」（第1章¹⁰）に、「厳しい兄」「兄の賜物」「長兄の帰朝」「恨めしい兄」など、兄との思い出を幾つか記している。それらの記述から、小波にとっての兄は、厳しいが彼の文学への志向を見守ってくれたとの思いがあることが窺える。立太郎は、若くして結核で死去するのであるが、この16歳も歳の離れた兄は、父、修が鷹揚であり家計のことを考えない人物だったらしく、巖谷家の一切を仕切り、小波の教育についても自ずと権限を奮うようになる。立太郎自身は、医者を継ぐべく、1877（明治10）年から約5年間、ドイツに留学したが、その間、小波にドイツ語を習得させるためにオットーのメルヘンシャッツ（お伽嘸集）を送った。そして、このことが小波をお伽話の世界に惹き込むことになった。帰国後、立太郎は胸を患い、回復の後、大学の教授になったので、小波が医者への道に進むよう父に進言し、医学予備校に進学させた。しかし、小波は、18歳の頃、兄に無断で医学予備校に退学届を出し、文学で生きる方法を模索し始めた。麴町の番町教会から洗礼を受けたのもこの頃である。

その後、硯友社で尾崎紅葉等と出会い交友を深めた。また、祖母と兄を相次いで亡くしたり、小説家としての自分に限界を感じたりするなど、苦難の時代があったのだが、ついに1891（明治24）年、『黄金丸』という児童文学作品で世に出ることになった。18歳から22歳までの出来事である。以後、「お伽のおじさん」として世に知られるようになった。

このように、小波は、最上位層の家庭に生まれ育ち、ドイツとの関わりも深い。幼少の頃から交友範囲も広く、小説家を目指すくらいであるから人間に興味を抱き、観察する習慣も次第に身に付いたのであろう。『世間學』に限らず、彼の著書には交友を通じた人間観が描かれている。一方で、医師の道に進むべく、兄が引いたレールに乗ろうと努力はしたのだが、結局、自らの意志で訣別して好きな小説家の道を選び、紆余曲折を経て、児童文学者として大成した。これが小波の半生である。

第二章 『世間學』と「世間」

第一節 「WELT BÜRGER TUM」と「世界市民主義」

本節では、『世間學』の特徴を明らかにするために、表紙に記載されている「WELT BÜRGER TUM」という表記について考察したい。

『世間學』は、1908（明治41）年12月8日に東京市の日本橋にあった服部書店から発

刊されている。目次は示されていないが、全 15 章、162 頁の構成となっている。表紙には、ドイツ語で「WELT BÜRGER TUM」（原著に従い 3 語を話して記載する）とあり、「世界市民主義」と訳すことができる。小波自身、前節で確認したようにドイツとの関わりが深く、自らも 1900（明治 33）年、31 歳の時から約 2 年間、ドイツのベルリン大学附属東洋語学校へ講師として招かれた経験を持つ。帰朝後は、約 3 年間、早稲田大学文学部で講師としてドイツ文学史の講義をしたり、帝国独逸学協会独逸語学校の夜間教授をしたりした。『世間學』には、1907（明治 40）頃に「ハイカラ号」という雑誌の中で「文士ハイカラ」として（恐らくは読者から）選ばれており、それに肖り、「ハイカラ気焔」（第 4 章 11）と称してパンカラを非難しつつ「ハイカラこそ、我帝國の國是なるをや」と記している。このように、『世間學』の内容は、ドイツをよく知る小波が、国際社会における日本の在り方を文明化という観点で論じていることが特徴の一つである。そして、ドイツと比較しながら論じることについての彼の意気込みは、表紙に「WELT BÜRGER TUM」と記したことにも窺える。ここで、彼の BÜRGER（＝市民）の捉え方を考察するために、当時の代表的国語辞典である『言海』と『辞林』を手掛かりに考察したい¹²。『言海』を取り上げる意味は、日本が世界の中で変化していく様相が言語の中からも窺い知れるからである。以下、相互に比較しながら小波の「世間観」の考察を進める。

日本近代初の国語辞典である『言海』は 1891（明治 24）年に編纂されたが、そこには「市民」という用語はない。しかしながら、『世間學』発刊の前年、1907（明治 40）年に編纂された『辞林』には取り上げられており、そこには「市民」の意味が「市中の住民」と簡潔に示されている。「市民」が「世間」とどのように関わるかについて、小波は述べてはいない。ここで、小波が「市民」をどのように捉えているかについて、『世間學』の中から「市民」に関係する語句をいくつか取り上げて確認しておきたい。

<表 1> 辞書に見える「市民」の訳及び「市民」に関連する語句の訳語の整理

	言 海 (1891)	辞 林 (1907)
世界	過去現在未来ヲ世トシ、東西南北上 下ヲ界トス。世。ヨノナカ。世間。	・よのなか。世間。・地球。四海。 ・各国。萬邦。 *世界主義という語句有
國家	一国ノ官民公私ノ事ヲ統ベテイフ 語	× *下記「個人」に表記有
社界 社會	×	相互作用又は共同生活する組織又は国家。 同種類の範囲。同一の仲間。
國民	クニタミ。国中の民。	・統治権の客体の一。一定の統治権の下に 服従関係を有する人類 ・同一の国籍を有する人民。同一の種族に 属する人民。
市民	×	市中の住民
世間	ヨノナカ。人間世上	有情ものの、相依りて生息する境界。人類 の相依りて生活する境界。世の中。自己以 外の一般の人々。自己の活動する範囲。
個人	×	国家又は社会等に対して、個々別々の人の 称。一個人。

（「国立国会図書館デジタルコレクション」を参考に筆者作成）

「世界市民主義」という語句は、『言海』や『辞林』にはなく、これも小波の造語である

と推測できる。ところが、『辞林』には「世界主義」という語句が掲載されており、「世界の平和発達若しくは、世界の関係交渉等を標準とし、一地方一国土に偏せざる主義」と訳されている。そこで、次に「市民」を市町村制の成立との関わりで見たい。

第二節 「市民」と「世間」

市町村制が公布されたのが、1888（明治 21）年 4 月 25 日、いわゆる「明治の大合併」によって成立した。市制は、都市部の「市」に適用されたが、当初は少数の大都市（38 都市）に限定された。東京市はこの時に成立したものである。そして、市町村制の成立に深く関わったのが、ドイツ人のお雇い外国人であり法律家のアルベルト・モッセである。モッセの考え方の基本は、国家全体の統治の安定の観点から地方制度を考えるというものであり、中央集権的な国家では、国家の統治が安定せず、地方分権と地方自治は、統治の不安定さを解決する手段で、要するに「自治の思想」である¹³。この点からすると、ドイツの自治の在り方を念頭に置いた上で、「WELT=世界→BÜRGER=市民→TUM=主義(性)」の順に、すなわち、「世界の中の市民=自治」主義という意味で用いたのであろうと推測できる。しかしながら、『世間學』には自治に関係する記述は見当たらず、当時の東京市の風紀上の実態との関わりで論じられているに過ぎない。

小波は、「世はさまざま」（第 8 章¹⁴）で、

日本の社界は、人前で腰や屁をして、平気で居る社界だ。雪隠へ杓を入れてかきまはす社界だ。客の前へおマルを持ち出す社界だ。椽側から子供に小便させる社界で、溝浚ひの泥を路傍に置く社界で、大掃除の埃を大道に飛ばす社界だ…而も所謂の潔癖の國民が、此等に對しては一向嘔吐を催さない社界だ。

日本の社界は、醜業婦を公然貴賓に侍せしむる社界だ。藝者上りの細君を、平気で宮中へ伴ふ社界だ。待合の女將に我家の客を接待させる社界だ。妾宅に知人を迎へて用を辯ずる社界だ。遊廓を名所の中に算へ込む社界だ。有夫姦騒動を二號活字で新聞に書く社界だ。而も所謂の武士道論者が、此等に對してはほとんど眉を顰めない社界だ。

この類の記述は、更に続くのであるが、この世に多少の醜事が起こるのも“娑婆の常”して容易に防ぎえないとしながらも、これが防げないからと言って「無暗に開け放しの垂れ流しは成らぬ」、と断じる。そして、下水設備の整備を引き合いに出し、それを社会制裁のようなものだとした上で、「社会制裁の嚴重な國は國民の思想が健全である。之に反して、その自墮落な社界は、勢ひ風紀が廢頽して来る」と論じるのである。

このように、小波は文明の都会—彼は文明の都会と未開の市街とを区別している—の在るべき姿について、日本とドイツとの比較で論じてはいるが、自治については論じてはいない。そして、この章の最後に、「道理でこの東京市には、まだ定全な下水はなかつた。」と皮肉交りに締めるのであるが、要するに、彼が記したかったのは、（東京）市民を国際的に通用する市民に近づけるには文明的であるべきであるが、“風紀上”、まだそこまでは到達してはいない、ということであり¹⁵、風紀について論じたに過ぎないのである。

次に、「世間」を「市民」=BÜRGER、と訳したことについて考察したい。〈表 1〉中に「世間」の訳語を幾つか挙げておいたが、「世界」には「世間」の意味もあるものの、前節で確認した彼の「人間學」に対する考え方や『世間學』では人と人との関わりについて記述されたものが圧倒的に多いことから、「世間」は限定された中での人と人との関わり、『辞林』にある「有情ものの、相依りて生息する境界」という意味が彼の「世間」の捉え方に一番近いと考える。すなわち、自治の理想に少しでも近づけたいという意図よりも、

風紀上の観点からドイツ（西欧）と同等の文明都市にならなければならないという思いから、「世間」を「市民」＝BÜRGER、と独自に訳し、「WELT BÜRGER TUM =世界（の中の）市民主義」と冠したと推察できるのである。

第三章 『世間學』と『桃太郎主義の教育』

第一節 『世間學』の内容と小波の教育観

さて、ここで改めて、『世間學』の内容について紹介しておきたい。＜表2＞は、『世間學』の目次を一覧にしたものである。

＜表2＞『世間學』の目次一覧（全15章）

章	目次	頁数	章	目次	頁数
1	人間學	13	9	余の観たる學生	10
2	世と友	4	10	船と文學	12
3	吾が眼	4	11	教育と文藝	8
4	ハイカラ氣焰	5	12	健全なる青年の娛樂	9
5	金の人	8	13	電車の石	6
6	情の悪人意の悪人	9	14	嘘の価値	10
7	人さまざま	4	15	世界的文學と戦後の武器	11
8	世はさまざま	4			

(附録)

1	順境の偉人	31	2	三たび心性を改めた偉人	17
---	-------	----	---	-------------	----

*『世間學』には目次番号は付されていないので、筆者が便宜上、番号を付した。

第一章で確認したように、『世間學』は、小波の言う「人間學」を中核とし、様々な人間との出会いを通して教育観や人間観を語るのが特徴である。それを教育との関係で当時の学生の様子を記したのが第9章であり、彼の教育観が如実に記されているのが第11章である。本稿は、小波の教育観について論じることも目的の一つであるので、これらの章を紹介しながら考察をすることにした。

最初に、第9章¹⁶について。この章は「余の観たる學生」と題して、5つの例を紹介している。以下、簡潔に見ておきたい。

①校友会の大立者：

社会の上流に属し円満な家庭に育った中学生。体格も立派で運動会や音楽祭でも顔が知れており、人付き合いも上手く、気の利いた青年。しかし、勉強が頗る苦手で落第ばかりなので、米国へ“高飛”留学をしようと考えたが、懇意にしている博士が不賛成。少しヤケ気味になり、最近は頻りに新体詩を作って気を紛らわしている。

②苦学生の手本：

熱心な手紙で遂に学僕として、ある紳士の玄關番になった地方出身の青年。当初は懸命に働き、夜学にも熱心に通っていたが、次第に田舎臭さが抜け、生意気臭さが出てきて仕事も手を抜くようになった。結局、田舎へ返されたが、その後、学費催促の督促状が学校から届いた。

③一種の危険人物：

醜業婦を蛇蝎の如く思う一方で、女学生を天使とばかりに渴仰し、束髪に袴をはいた女を見るといつも後ろから付いて行き声をかける学生。彼は教会に籍を置き青年会でも有望な方だという。しかし、それが評判となり、大方の女学生は彼を避けて通るようになった。

④名刺にも雅号を刷らせ：

学校の作文でいつも満点を取るので人からも煽てられ本人も慢心している。名刺にも雅号を刷るなど当人は文士気取り。ある大家に数学ができるかと問われて頭から冷や水を被せられたが、憎まれ口を叩く。この学生は中学の5年目。弁護士をしている彼の兄は彼を馬鹿と呼んでいる。

⑤不得要領：

最初は軍人、次に高等学校の工科、更に文科、医科を受験するも全て落第。私立の法学校に入学したその学生は、地に足がつかない。学校で聴く講義は神妙に復習はするのだが、人に内容を聞かれると一向に要領を得た答えが出来ない。人に迷惑も掛けないが友達の世話を良くする訳ではなく、腹を立てた顔も見せないが別に嬉しい顔を見せる訳でもなく、何とはなしに只、ヌウとしている。知人ただけに案じられる。

これらの例は、第一章・第一節で確認した、「人間は立方体で活動的で変転性であり、また、品行方正の人は必ずしも人格が高いとは言えない」を具体的に表している。「人間學」は一般の成人男女を対象としているだけでなく、学生もその対象としていることが判るが、これは①～⑤にも散見される「青年」という語句と無関係ではない。小波が『世間學』を執筆した頃は、藤村操の投身自殺（1903：明治36年）に代表されるように「煩悶青年」が一種の社会問題となっていた。小波は第14章¹⁷で、「此頃學生の墮落問題が起つたり、また煩悶問題が開える様だ。共に甚だ面白からぬ現象だが、僕に云はせると、墮落と云ひ、煩悶と云ひ、共に學生の分を忘れた話、即ち彼等が年齢不相應に身を持たうとするから、遂にかう云ふ事になるのだと思ふ。」と論じている。そして、「子供は子供らしくして居れば、何等の危険氣もない筈ではないか。それを強ひて大人ぶらうとする。（中略）之れが抑も間違の初まりだ。」と断じている。加えて、同章では、空想が理想を生み、そこから実行が生まれるという小波自身の論理から空想の大切さを主張しているが、これは、お伽噺が迷信を助長するという“博士殿”のお伽噺への批判に反論したものであり、かつ、科学教育ばかりに力を入れる学校教育に対して批判したものである。これらの記述に『桃太郎主義の教育』を執筆する動機が窺える。

次に、第11章¹⁸について。この章は、教育と文芸（小説）との関わり—文芸（小説）が教育に果たす役割—について記されたものである。文芸との対比で小波の教育観が如実に表現されているので、詳しく見ておきたい。

本章の書き出しは

沈香も焚かず屁もひらずと云ふ主義は、由来僕の感服せざる所、寧ろ惡に強きは善にも強しと云ふ方を、僕は一體賛成するのだ。

から始まり、続けて、

元来今日の教教家は、帰納的の捌けた手段を執らず、演繹的の窮屈な方法に依って、人の子を鑄型にはめやうとして居る様だが、是が第一間違つて居る。

と記し、「小説こそ高等な教教書である」と主張する。彼は、

善を勧める計りが、元より教育の本旨ではない。又悪を懲す計りも、又訓戒の本意ではあるまい。寧ろ善悪利害の念を離れて、世態人情を白地に寫し、若くは世の潔缺陷、人の弱點を赤裸々に描き去つた所に、より大いなる教訓が含まれて居る。

と論じ、「なまじい見当違ひの正義を論じた、時世後れの修身學より、何れ程有効かしれはしない。」と修身を批判している。そして、「實に世間には、生物知りの衛生論者が居て、食物にも飲料にも、きちんきちんと約束を極めて、却って甚だ不融通ナ、デリケートな身體を作らうとして居るが、これは頗る愚な事だ。」と断じる。そして、育児法に関して、乳の分量を決めたり与える時間を決めたりする杓子定規な親の態度が却って子供を弱くしたりすることや、子供の行儀や口の利き方など、色々な事に世話を焼き過ぎる連中がいる、と記している。小波自身、修身に関しては、「缺點を抑え、長所をのみ發揮するのが、蓋し、修身の本意ではあるまいか。」と考えており、これは第一章・第一節で確認した、「品行方正の人、必ずしも人格が高いと云へない。」に通じる彼の考え方である。すなわち、小波は、積極性を養うことに教育の意義を見出しており、これが『桃太郎主義の教育』の執筆に繋がると考えられるのである。因みに、修身科は、徳目主義と人物主義が特徴¹⁹であり、1886年に教科書検定制度が開始された。その検定基準について、例話は「勸善的」なものであり、なるべく日本人の教材を使用することなどが示された。『世間學』が執筆された頃は、「第一期国定教科書」(1903～1909)の時期であり、国家主義的かつ儒教主義的な傾向を持っている。先に確認した、「善を勧める計りが、元より教育の本旨ではない」という主張にも明らかのように、小波は当時の修身科の教授内容に批判的であった。「沈香も焚かず屁もひらず」の消極主義よりも積極主義を奨励するのが小波の教育観であり、それは『世間學』執筆当初から窺えるのである。

第二節 『世間學』と『桃太郎主義の教育』との関係

本節では、『桃太郎主義の教育』の内容や『世間學』との関係について確認したい。

『桃太郎主義の教育』は、1915(大正4)年2月に東亜堂書房から刊行され、82章構成で「常識小観」という附録を含んで全356頁となっている。この「常識小観」については、本稿を進める上で欠かせないので、次節で取り上げる予定である。

最初に、『桃太郎主義の教育』の内容について、本稿で適時、指摘してきたように、桃太郎を題材にして、鋳型に嵌めたような画一的な当時の教育を批判し、これからの時代に相応しい国民の在り方や幼児期から積極性を重視した国民教育(筆者註:子育ても含む)を実践することを強調した処が特徴である。小波は、「迂闊な教育」(第6章²⁰)で、

日本の國民も、明治の初年と大正の今日とは、勢い同一の覺悟では済まされぬ。すればその國民を造るべき、教育の方針なるものも、亦異ならねばならぬ筈である。

という自身の考えを前提とした上で、

日本将来の國民教育は、正に桃太郎主義ならざる可からずだ²¹。

とし、その理由として、

兎にも角にも今日の教育は、學校でも、家庭でも、おとなしい子は作っても、つよい子は作らうとしない。

と、当時の教育を「生垣教育²²」と呼んで苦言を呈す。そして、

抑々桃太郎なるお伽噺は、その初から終まで、積極的に、進取的に、放膽的に、而も亦楽天的である。

と、カチカチ山や花咲翁などのお伽噺と比較した上で桃太郎主義の教育の実践を主張するのである²³。小波がそのように考えるに至った理由の一つは、当時の国際社会における日本の立場と、それを踏まえた今後の日本や日本人の在り方を想定してのことである。

彼は、当時の日本を「幼い国」と位置づける。そして、「名（筆者註：日本が伝統的な国であるということ誇るような態度や古い考え方を尊重する態度）を棄てて實を取る時代」であるという自身の考えに立脚して、「幼い国」は「幼い国」らしく、「大人ぶらず」に立場を弁えた上で積極的に進むことを主張する。そして、「独立心の必要」（第13章²⁴）で、

その独立の氣概と云ひ、進取の氣象と云ひ、之を少年時代から養成するには、まづ國民教育が肝腎だ。そして、其の教科書としては、即ち我が桃太郎なるものが、その無二のものである事を、僕は敢えて主張する。

と、記す。そして、最終章²⁵で、

要するに、我が日本の将来は、より大に、より強くあらねばならぬ。それにはその國民を造るべき、教育の方針を根本的に改革して、従来の姑息な注入主義を斥け、専ら放胆な開発主義を執り度い。頭に斗り血をのぼせて、腹に力の無い様な人間、精神のみ勝つて、実力の之に伴はない國民は、断じて造り度くないと云ふ事である。

と主張するのである。小波が、このような思いを強くしたことの理由について、アメリカの存在が考えられる。彼は、「露国よりも油断のならない大國が、又ムクムクと頭を伸して来た、それは即ち米國である」と記している²⁶。先に確認したが、『桃太郎主義の教育』が発刊されたのが1915年であり、第一次世界大戦の時期に相当するが、この時期、アメリカは、まだ参戦してはいない。小波は、1909（明治42）年に、渋沢栄一を団長とする米実業団に参加し、約4ヶ月間、北米各地を歴訪した。そして、その日記を「国民新聞」に連載したが、『桃太郎主義の教育』にもアメリカの知力と財力を称賛したことを示す記述がある²⁷。『世間學』はドイツを基準にした記述が大半を占めたが、『桃太郎主義の教育』ではアメリカを意識した記述になっている処も特徴の一つである。

子育てに関しても、「和蘭の母と英吉利の母」（第60章²⁸）という一章を設けて、船中で子供の安全を気遣う母親について、干渉し過ぎる和蘭の母を批判し、放任しているようで監督を忘れない英吉利の母を称賛するなど、当時の2国の国際的な立場に立脚して英吉利の母の子育て方法を肯定的に受け止めている。そして、それを受けて、桃太郎の家庭について、

して見るとかの老人夫婦は、この桃太郎を教育するに、頗る放任主義を取つて居たらしい。そしてその放任の間に、きじめきじめ（筆者註：けじめ）をよく締めて居たの

は、丁度、あの船中における英吉利の母親の様であつたのだろう²⁹。

と記している。更に小波は、親が自分の理想通りに子供を育てようとすることに對して、スウェーデンの教育学者・エレン・ケイを引き合いに出しながら、「(中略) 我が子を知ると云ふ明が、大いに缺けて居る」と批判する³⁰のであるが、これは、第一章・第一節での「人間學」の考え方に繋がると考えても大過はない。

以上、『桃太郎主義の教育』について、その特徴を整理したが、桃太郎を題材にしたことについては、若干、言及しておく必要がある。アメリカの歴史学者、ジャン・W・ダワーは、「桃太郎パラダイム」³¹という一語に象徴的に示されるように、軍国主義への傾斜に合わせて桃太郎も都合よく利用され、それが政治的イデオロギーを纏いながら国民の間に広がり、桃太郎が単なるお伽噺の主人公を越えて政治的に利用された³²。桃太郎は、1887(明治20)年に文部省編纂の『尋常小学読本(巻一)』に初めて登場して以来、第二次世界大戦の終結に至るまで、小学校の国語教科書に数多く掲載されたが、軍国主義への傾斜に小波がどの程度、関与したかは分からない³³。

第三節 「常識小観」から「教育小観」へ

次に、「常識小観」³⁴を取り上げたい。

「常識小観」は、『桃太郎主義の教育』の附録として掲載されたものであり、全12章、87頁に渡って書かれたものであるが、注目すべきは、その内容の半数以上が『世間學』の内容と一致することである。

<表3> 『世間學』と「常識小観」との目次の比較

章	世間學・目次	章	常識小観・目次
1	人間學	1	楽学主義
2	世と友	2	読書と交際
3	吾が眼	3	世と友
4	ハイカラ気焔	4	金の人
5	金の人	5	○情の人、意の人
6	○情の悪人意の悪人	6	人さまざま
7	人さまざま	7	世はさまざま
8	世はさまざま	8	吾が眼
9	余の観たる学生	9	時間の利用
10	船と文學	10	趣味と經濟
11	教育と文芸	11	健全なる青年の娛樂
12	健全なる青年の娛樂	12	教育と文芸
13	電車の石		
14	嘘の価値		
15	世界的文字と戦後の武器		

(筆者作成)

* 『世間學』の第6章は「常識小観」へ転載するに当たって修正されて
されているので「○」を付した。

網掛け部分が一致している章を指すのであるが、<表3>から分かるように「常識小観」は全12章中8章が『世間學』の章と一致し、内容についても、章の構成は多少入れ替わ

っているものの『世間學』で記された内容と全く一致するのである。従って、『世間學』での一連の教育観が『桃太郎主義の教育』にも通底していることが判る。ここで、「常識小観」執筆の意義を考察するために、第一章³⁵の「楽學主義」について確認しておきたい。

小波は、「楽學主義」について、まず、学問を文明人という観点で日本国民が一般的に修めなければならないという意味での広義の「普通學」と「専門學」とに分類する。次に、楽學を苦學との対比の上で、「要は學問に苦まず、學問に楽しめ」と主張し、苦學を必ずしも賛成しないという立場を採る。その根底には、「抑も學問（筆者註：専門學）なるものは、これを苦しんでまでも、猶修めねばならぬものであろうか」という小波自身の問いがあり、「即ち適質を以て、或適學に就き、適業に従ふならば、その學や業わ必ずその人を楽しいものになる」という彼自身の考え方がある。この考え方は彼自身の“順境”という出自とそれに伴う彼自身の幸福感が根底にあると推察するが、ただ、この点に関しては、下層の家庭に生まれ育った子供たちや地方の子供たちが能力次第で出世できる「立身出世」の風潮に対する小波の批判と見れなくもない。本章の第一節で確認した、学生（＝青年）の実態から勘案すると、むしろ、「順境に在つて遂に成功せぬ人を見て、「彼は苦勞をしなかつたから、ろくな者に成れなかつたのだ。（中略）」とこう評する」当時の「苦學主義」を尊重する風潮に対する批判の方が強いのではないかと推察できる。更に続けて、教育万能論者を取り上げて、

所詮人間に天賦のある事は、争う可からざる事實である。彼の教育万能論者は、教育に依つて人間を如何にでも改造すると云う。然し我輩は疑わざるを得ぬ。

と、批判するのであるが、前節で彼がエレン・ケイを引き合いに出したことを確認したことからも判るように、彼の人間観や教育観からすると意にそぐわないものであったことが理解できよう。

このように、「楽學主義」は、「常識小観」の第一章として、自身の学問に対する基本的な態度や当時の教育方法に対する批判、そして自身の教育方法について記されている。そして、それを出発点として、『世間學』で記された内容がそのまま記載されているのである。

処で、「常識小観」は、『桃太郎主義教育新論』では「教育小観」と名称を変えて附録として掲載されている³⁶。名称を変更した手掛かりを知るために、『桃太郎主義教育新論』の冒頭部分にある「改稿の序」を紹介したい。

本書は去大正四年、東亜堂たる書肆から發行されたものであつた。爾來已に十餘年を閲みし、當時わ世界大戰の當初であつたのが、今でわ大活劇も了つて世界わその為めに蹂躪されて、舞臺を、専ら修理に勉めて居る時である。

従つて時勢わ大分變つて居るが、而ち此書に論じてある大要は、一即ち私一個としての意見は、必しも豹變の要を認めない。むしろますます痛切を感ずる處である。

依て此度に賢文館主の需めに應じて、多少の字句を修正した書で、再び世間に高調して、敢えて大方の教を乞う事にした。

ここに記載されているように、『桃太郎主義教育新論』は、多少の字句や年号を修正した以外、章立てや内容は同じであり、それは「教育小観」も同様である。当初、「常識小観」としたものが、国際社会における日本の在り方や軍国主義への傾斜に伴って「教育小観」に名称を変更した処に、日本の教育の在り方に対する不安を抱いていたことが読み取れるのである。

おわりに－『世間學』の現代における教育的意義について－

本稿は、巖谷小波の教育観の根底には『世間學』での考え方が存在し、『桃太郎主義の教育』とも密接な関わりがあることを明らかにした。小波は、『世間學』執筆の頃から、画一主義や注入主義を消極的であると批判し、自身の西欧に対する知識を抛り所に国際社会における日本の立場を視野に入れた上で、積極主義を奨励することを一貫して主張してきたわけである。彼の言う積極主義は、「主体性」と捉えて考えても大過はなく、このことは、「主体性」の欠如が戦前から続いていることを示している。従って、彼の教育観は、現代の学校教育や家庭教育に一石を投じるものであると読み取ることが出来る。

『世間學』には、「世間を知らんと欲せば、まづ人間を知らざる可からず」という小波の言葉が象徴するように、彼の「人間學」が根底にある。立方体で活動的で変転性である人間の特質が世間を構成するという理解に立てば、人間を深く探究することで世間を知り、そして世間を変えていくことが可能であると考えられる。その意味で、『世間學』は、現代の教育や家庭の在り方を「世間」という観点から考える上でも示唆的な資料なのである。

註

- 1 『世間學』については「国立国会図書館デジタルコレクション」に拠る。尚、昭和3年に『處世常識世間學』が日本青年社より発刊されており、小波は序講を執筆している。
- 2 『世間學』1頁～13頁。
- 3 『桃太郎主義の教育』と『桃太郎主義教育新論』について、『桃太郎主義教育新論』は『桃太郎主義の教育』で記された年代や細かな表記を修正した以外、内容は変わらない。従って、本稿では、混乱を避けるために、特に断らない限り、『桃太郎主義の教育』を取り上げることにしたい。
- 4 尚、「人間學」は、巖谷小波著『小波世間論』（1921（大正6）年6月。日本書院）に、「人間學」として『世間學』の内容がそのまま記載されている。（287～297頁）
- 5 因みに、小波は、「吾が眼」（第3章）で、自身の「眼」について、「自己を知ると知らぬとが、やがて遇不遇の分かれ目になる」と記している。
- 6 序文に「蓋し世間とは、人間の集合したものを指す」とある。因みに、小波は『小波身上論』で、「自分と世間」「病氣と自覚」の各節で、重病を患って改めて人間の有難味や各人との距離感（小波はそれを「メートル」と表現する）が確認できたと記している。（240～241頁）
- 7 「特別の教科 道徳」の指導内容には、A主として自分自身に関する事、B主として人との関わりに関する事、C主として集団や社会との関わりに関する事、D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事、の4つの視点があり、Cに近い。「処世術」については「人間の生き方」に結び付けて解釈することができる。
- 8 1913（大正2）年3月に芙蓉閣より刊行。パラチフスからの復帰を機に自らの半生を振り返ったものである。尚、小波の生涯については、御子息で作家の巖谷大四が一冊の本に著している。（『波の登音－巖谷小波伝－』文春文庫、1993年12月。）
- 9 小波の幾つかの著書には“順境”という語句が確認できる。『世間學』では、附録で「順境の偉人」と題してドイツの詩人、ゲーテの一生を追いながら“順境”な家庭で生まれ育った人間を肯定的に記している。
- 10 『小波身上論』1頁～102頁。
- 11 『世間學』21～25頁。

- 12 いずれも「国立国会図書館デジタルコレクション」に拠る。
- 13 松沢祐著作『町村合併から生まれた日本近代—明治の経験—』、講談社選書メチエ 63、2013年11月。160～166頁。
- 14 『世間學』47～50頁。尚、阿部謹也が自身の「世間論」を補うために言及している。（『日本人の歴史認識』岩波新書 874、2004年1月。93～95頁、116～118頁）
- 15 「情の悪人意の悪人」（第6章）には、「東洋風に云ふ君子、ハイカラ式に所謂るゼントルメン！是が今日、人間として世に處すべき、理想の人格なのである」とある。
- 16 『世間學』51～60頁。
- 17 『世間學』94～104頁。
- 18 『世間學』73～80頁。
- 19 貝塚茂樹著『道徳教育の教科書』（学術出版会、2009年3月）。31～33頁。
- 20 『桃太郎主義の教育』11～14頁。
- 21 『桃太郎主義の教育』11頁。
- 22 『桃太郎主義の教育』15～17頁。
- 23 小波は、カチカチ山や花咲翁の話を「消極的の物」と捉えており、それを「なかれ主義」（消極的：「～するな」と抑える方の話）、とする。そして桃太郎を「あれよ主義」（積極的：「～しなさい」と勧める方の話）としている。（37頁）。
- 24 『桃太郎主義の教育』28～30頁。
- 25 「頑固な鬼を退治せよ」（第82章）。265～267頁。
- 26 『桃太郎主義の教育』21頁。
- 27 「仙人掌の牧場」（第31章）、「禿山のパラダイス」（第32章）。ここで小波は、アメリカの知力と財力を称賛している。（「智力と財力」（第33章）も参照の事）
- 28 『桃太郎主義の教育』176～180頁。
- 29 『桃太郎主義の教育』186頁。
- 30 「親の心得違ひ」（第64章）。192～196頁。
- 31 齋藤元一訳『容赦なき戦争—太平洋戦争における人種差別—』平凡社ライブラリー、2001年12月。
- 32 加原奈穂子「昔話の主人公から国家の象徴へ—「桃太郎パラダイム」の形成—」『東京芸術大学音楽学部紀要』2010年。
- 33 この点について、加原は、「当時の小波の影響力を考えると、彼の唱えた「桃太郎主義」は、先に触れた学校教科書の桃太郎解釈の変化にも、一定の影響を与えたと考えられる。」としている。（前掲註32論文、64頁）
- 34 269～356頁。尚、『世間學』執筆から『桃太郎主義の教育』執筆までの間の1911（明治44）年から2年間、小波は通俗教育調査委員に任命されている。通俗教育調査委員会については、大逆事件を契機とする文部大臣・小笠原栄太郎の復古的な徳育主義の立場による「我国固有の国民道徳」の涵養を目的としたものであるというのが一般的理解である。（倉内史郎著『明治末期社会教育観の研究—通俗教育調査委員会成立期—』、野間教育研究所紀要・第20集。講談社刊。1961年12月。）小波は、委員任命後、パラチフスに罹り（そのことがきっかけで『小波身上嘸』を執筆）、療養生活を送ったので、具体的な活躍は分からず、彼の教育観からすれば「復古的な徳育主義」は受け入れ難いものであったと想像できる。本稿で取り上げた彼の一連の著作の中で、通俗教育委員会については、通俗教育会の講演で花巻を訪れたという記述があるのみである。（『小波世間嘸』362頁。）
- 35 『桃太郎主義の教育』所収「常識小観」269～280頁。
- 36 『桃太郎主義教育新論』所収。227～304頁。

<付表> 『桃太郎主義の教育』目次一覧

章	第1章～第30章	章	第31章～第60章	章	第61章～第82章
1	富士山と桃太郎	31	仙人掌の牧場	61	馬と人の子
2	嘶の概要	32	禿山のパラダイス	62	親の本分
3	新店の発展	33	智力と財力	63	になるとである
4	子役の未来	34	若い国若い嘶	64	親の心得違い
5	大切な試験	35	金の茶釜	65	親の三倍
6	迂闊な教育	36	名家の坊ちゃん	66	錆びた包丁
7	えらい人物	37	老若と生死	67	靴と下駄
8	生垣教育	38	午前の活気	68	水道と井戸
9	十人十色	39	薫育の力	69	老いた身、若い心
10	勝者の仲間入	40	大孝行大忠義	70	材木か盆栽か
11	頼まぬ同盟	41	可憐な暴れ者	71	自縄自縛
12	合せ物と離れ物	42	おとなしい子	72	臨機応変
13	独立心の必要	43	盆栽に大木	73	品行と人格
14	残酷なかちかち山	44	情の力	74	不見轉主義の忠君愛国
15	なかれ主義	45	宋襄の仁	75	羊に荷車
16	復習思想の愚	46	不施の利益	76	天賦の美芽
17	滋養的教訓	47	素志の軟化	77	道の捷徑
18	柴刈と洗濯	48	棟梁の器	78	大なる正直
19	大きな桃	49	局量の大小	79	正直と桃太郎
20	無造作の妙	50	威と徳	80	発展的国民性
21	無名の師	51	智仁勇	81	桃太郎の銅像
22	満腹主義	52	決死隊と機関銃	82	頑固な鬼を退治せよ
23	日本一	53	真勇と盲勇		
24	遠慮の失敗	54	三拍子の揃い		
25	直情径行	55	忠盛と長矩		
26	活きた施興	56	抜かぬ太刀の功名		
27	公平と雅量	57	沢庵厭しが丈競べ		
28	アア面白かった	58	長者の徳		
29	十をもって一貫す	59	命令の経、小言の緯		
30	偏狭な愛国心	60	和蘭の母と英吉利の母		

(現代仮名遣いで表記)

* 網掛けになっている章は、巖谷大四氏の著書、『「桃太郎主義教育」の話』（博文館新社、1979年）で削除された章を指す。このことについて、巖谷氏は、「今日の時代にそぐわない部分は、許される範囲で編集し直し、削除した。」と「あとがき」で記している。尚、「あとがき」に、「この本は、小波が、「桃太郎主義教育新論」と題して、大正四年（私の生まれた年）に書いたもので…」という記述があるが、恐らくは、『桃太郎主義の教育』であろうと思われる。